

# 白樂天「老嫗解」考

鈴木敏雄

## 一、緒言

白樂天の詩は友人の元微之とともに蘇東坡（蘇軾、一〇三六—一一〇一）に「元輕、白俗」（元は軽く、白は俗なり）と評されて以来、俗っぽいものとして評価が定まった感がある。蘇東坡「祭柳子玉文」（「柳子玉を祭る文」）には、

猗歟子玉、南国之秀、甚敏而文聲發、自幼從橫武庫、炳蔚文囿、獨以詩鳴、天錫雄味、元輕、白俗、郊寒、島瘦、嘹然一吟、衆作卑陋。

〔東坡全集〕卷九十一「祭文」

（あの子玉、南国の秀、甚だ敏くして文聲発す、幼きより武庫に従横にして、文囿に炳蔚たり、独り詩を以つて鳴り、天は雄味を錫ふ〔注〕。元は軽く、白は俗、郊は寒く、島は瘦せ、嘹然として一たび吟ずれば、衆卑陋なりと作す。）

とある（注）。この「卑陋」であるとの指摘を承け、同じく宋の許顛『彦周詩話』でも、

東坡「祭柳子玉文」「郊寒、島瘦、元輕、白俗」、此語具眼。客見詰曰「子盛稱白樂天・孟東野詩、又愛元微之詩、而取此語何也。」僕曰

「論道當嚴、取人當恕、此八字、東坡論道之語也。」（宋、許顛『彦周詩話』）

（東坡の「柳子玉を祭る文」の「郊は寒く、島は瘦せ、元は軽く、白は俗なり」は、此の語具眼なり。客見て詰りて曰はく「子は盛んに白樂天・孟東野の詩を称へ、又た元微之の詩を愛するに、而るに此の語を取るは何ぞや」と。僕曰はく「道を論ずるは當に厳しかるべく、人を取るは當に恕かるべしとは、此の八字、東坡道を論ずるの語なり」と。）

と、蘇東坡の説を後押しする。白樂天・元微之らは、人物という点ではともかくも、詩に載せる道の、雅を傷めてしまう俗っぽいときたら耐えられぬ、と。

ところで、蘇東坡に先立つこと三、四十年前、同じく宋の彭乘（生卒年未詳）〔注〕はその『墨客揮犀』で、

白樂天每作詩令一老嫗解之、問曰「解否。」嫗曰解則錄之、不解則又復易之。故唐末之詩近於鄙俚也。（宋、彭乘『墨客揮犀』卷三）

（白樂天は詩を作るごとに一老嫗をして之れを解せしめ、問うて曰はく「解するや否や」と。嫗解すと曰へば則ち之れを録し、解せざれば則ち又た復た之れを易ふ。故に唐末の詩は鄙俚に近きなり。）

と言っている。いわゆる「婆さんにでも分かる詩」すなわち「老嫗の解」伝

説の始まりであるが、それは、「鄙俚に近し」すなわち白詩の俗っぽさの原因が「老嫗の解」に在ることを指摘して、以後、白詩評に根強く付き纏うことになる。

その後、同じく宋の釈惠洪（徳洪、一〇七一—一一二八）が、その『冷齋夜話』巻一に彭乘のこの評を引用して以来、その他の人士およびその著、たとえば宋代では孔平仲『談苑』（巻四）、蔡正孫『詩林広記』（巻十）、曾慥『類説』（巻四十八、巻五十五）等が挙げて「白樂天は、婆さんにでも分かる詩を作り、俗っぽくなった」という一つの伝説を流布させ、寄つてたかつて「白は俗なり」の悪評を鼓吹したため、蘇東坡の「元輕白俗」説と相俟つて、白樂天は詩人としてもはや一流ではいられない程に貶められてしまつた。

併せて、同じく宋の祝穆も『古今事文類聚別集』に白樂天の「本伝」、「贊」、および彭乘『墨客揮犀』の評語をまとめて引き、

白居易作樂府及詩百餘篇、規諷時事、流聞禁中、上見而悅之、召爲翰林學士。杜牧之謂、白居易詩纖艷不逞、非莊人雅士所爲、流傳人間、子女父母、交口教授、淫言嫖語、入人肌骨不可去。或云、樂天每作詩令一老嫗解之、問曰解否、嫗曰解則錄之、不解則不復習之、故唐末之弊至於俚。（宋、祝穆『古今事文類聚別集』卷九「白樂天詩」）

（白居易は樂府及び詩百餘篇を作り、時事を規諷すれば、禁中に流聞し、上見て之れを悦び、召きて翰林學士と爲す。杜牧之謂ふ、白居易の詩は纖艷にして逞しからず、莊人雅士の爲す所に非ざるも、人間に流傳し、子女父母、口を交へて教授すれば、淫言嫖語、人の肌骨に入りて去るべからずと。或ひと云ふ、樂天は詩を作る毎に一老嫗をして之れを解せしめ、問うて解するや否やと曰ひ、嫗解すと曰へば則ち之れを録し、解せざれば則ち復たとは之れに習はず、故に唐末の弊は俚なるに至ると。）

と言っている。彭乘や蘇軾の指摘以前にすでに晩唐の杜牧（牧之）も白樂天の詩を「莊人雅士の爲す所に非ず」と指摘していると付け加え、すなわち白樂天の「纖艷」であり「淫言嫖語」であり「俗」であり「俚」であるとの評價はほぼ当初からあったと念押しをする。

これらの評価に対して、たとえば同じく宋の胡仔（生卒年未詳）は『苕溪漁隱叢話』（一一四八年成立）で、

『冷齋夜話』云、「白樂天每作詩令一老嫗解之、問曰解否、嫗曰解則錄之、不解則又復易之、故唐末之詩近於鄙俚。」又張文潛（張耒）云、「世以樂天詩爲得於容易、而未嘗於洛中一士人家見白公詩草數紙、點竄塗之、及其成篇殆與初作不侔。」苕溪漁隱（胡仔）曰、「樂天詩雖涉淺近、不至盡如冷齋所云。余舊嘗於一小說中曾見此說、心不然之、徳洪（惠洪）乃取而載之詩話、是豈不思詩至於老嫗解烏得成詩也哉。余故以文潛所言、正其謬耳。」（宋、胡仔『漁隱叢話』前集卷八）

『冷齋夜話』に云ふ、「白樂天は詩を作る毎に一老嫗をして之れを解せしめ、問うて解するや否やと曰ひ、嫗解すと曰へば則ち之れを録し、解せざれば則ち又た復た之れを易ふ、故に唐末の詩は鄙俚に近し」と。又た張文潛（張耒）云ふ、「世は樂天の詩を以つて容易より得たりと爲すも、而未嘗て洛中の一士人の家に於いて白公の詩草數紙を見るに、点竄して之れを塗り、其の成篇に及んでは殆ど初作と侔しからず」と。苕溪の漁隱（胡仔）曰はく、「樂天の詩は淺近に涉ると雖も、尽くは冷齋の云ふ所の如きには至らず。余旧と嘗て一小説中に於いて曾て此の説を見、心に之れを然らずとするに、徳洪（惠洪）乃ち取りて之れを詩話に載す、是れ豈に詩は老嫗の解に至りて烏ぞ詩と成るを得んやを思はずらんや。余故に文潛の言ふ所を以つて、其の謬りを正すのみ」と。

と言ひ、白樂天を弁護しようとはする。しかし白樂天が「淺近」であることは少なからず認めており、悪評は払拭し切れてはいない。同じく宋の魏慶之

(生卒年未詳)も『詩人玉屑』巻八(一二四四年成立)でこの胡仔の説を繰り返してはいるが、やはり悪評払拭の力にはなり得ていない。

時代はずいぶん降るが、欧化により文学の通俗性の評価が進んだずつと後世、「老嫗の解」ゆえに白詩は俗っぽいという根強い評価に対し、吉川幸次郎は次のように言う。

次に(白樂天の)第三の主張、或いはこれも主張の一つであつたことを思わせるほどに顯著な現象は、用語の平易さである。その私生活に於いて平凡の幸福を主張した彼は、詩の表現に於いても、極度に、或いは過度に、平易な言葉を愛した。日常的な言葉だけでも詩はできる、そう彼は主張するように見える。また詩の職務は政治への奉仕にある以上、なるだけ多くの人人に仕え得るように。そう考えたとも見られる。詩ができるたびに、字を知らないばあさんに讀んでかかせ、まだどこか分らないところは、とたずねたという傳説は、傳説ではないかも知れない。

『新唐詩選統篇』岩波新書 一九五四)

また、郭沫若も次のように言う。

……韓、柳の散文改革は、一種の改良主義にすぎず、彼らは古文の形式をもちいて封建主義の内容を宣傳した。封建的な支配階級が千年あまりの間、彼らを歓迎してきたのは當然である。元、白の「新樂府」はいうまでもなく、彼らの「千字律」もまたひじょうに人民に近づいたものであつて——「白樂天の詩はお婆さんにでもよくわかる」というのはみんなが知つている——「莊士雅人」の軽べつや敵視をうけないことのほうが、むしろ不思議なくらいである。(『片山哲』『大衆詩人白樂天』序)岩波新書 一九五六)

吉川、郭沫若ともに白樂天の復権を期し、白樂天は「婆さんにでも分かる

詩」を作り、人民に近づいて、平易で、雅ではない文学を主張したという点に於いて、好意的な評価を下している。通俗に価値を見出だす近代では、この程度の俗っぽさはもはや問題にならず、ここに至つて白詩の評価は好転している。

「婆さんにでも分かる詩」だから好いという評価が得られたのは良しとして、そこで問題としたいのは、吉川との評語の差である。片や「字を知らないばあさん」と言い、片や単に「お婆さんにでも」と言つている。すなわち、人民に近づいて、平易で、雅ではない詩とは、「字を知らないばあさん」にでも解る文学を主張したということなのか、それとも単に「お婆さん」にでも解るものを主張したということなのか。両者の見解に、些かの隔たりが見られる(註4)。そして今、この評語の差こそ、一考に値するものと考ええる。

そこからは、「白は俗なり」という評価と関連する「お婆さん」像の問題が浮上する。もちろん話は伝説ではあるが、吉川は「字を知らない」お婆さん像を捉え、郭沫若はいわば『莊士雅人』の軽べつや敵視をうける「お婆さん像を捉えていることになる。後者は換言すれば、「莊か」ではなく、「雅」でもないお婆さんである。今その像をさらに換言すれば、いわゆる「俗」ということになる。

単に「俗な」婆さんと言うのと、「字を知らない」婆さんと言うのとでは、その像は、やはり異なるであろう。

時代は少し戻り、「鬱怒」の詩人と言われる清の舒位(一七六五—一八一五)の絶句「又題『元白長慶集』後」二首の其一には、

誰識香山絶妙詞、女歌嫗解伎彈絲。再除一箇鷄林相、肯把黄金買白詩。  
(誰か識らんや香山絶妙の詞、女は歌ひ嫗は解し伎は絲を弾く。再び一箇の鷄林の相に除せらるれば、肯て黄金を把つて白詩を買はん。)(註5)

とある。白香山すなわち樂天の詩に黄金と取り替えてもよい程の購求価値が

あるのは、ほかでもない「女は歌ひ、嫗は解し、伎は絲を弾く」ほどの「絶妙」さが有るからだとし、「老嫗の解する」詩である点を躊躇なく賛美している。「俗」であることを評価し直そうとする大きな価値の転換がすでに行われている。誘因は何か(注6)。それはやはり、「女・嫗・伎」が理解する詩ということと関わってこよう。果たして「字を知らない」老嫗が理解する詩ということになるのか、再考の余地があると思われる所であつて、それを明らかにするためには、どうしても「老嫗」像を説明する必要がある。

## 二、「老嫗」像

明の俞弁(一四八八?—一五四七?)は、『逸老堂詩話』卷下(注7)で次のように言う。

白樂天詩、善用俚語、近乎人情物理。元微之雖同稱、差不及也。李西涯『詩話』云、「樂天賦詩、用老嫗解、故失之粗俗。」此語蓋出於宋僧洪覺範之妄談、殆無是理也。近世學者往往因此而蔑裂弗視。吳文定公讀『白氏長慶集』有云「蘇州刺史十編成、句近人情得俗名。垂老讀來尤有味、文人從此莫相輕。」(注8)

(白樂天の詩は、善く俚語を用ひ、人情物理に近し。元微之は同に稱せらると雖も、差や及ばざるなり。李西涯の『詩話』に云ふ「樂天詩を賦し、老嫗の解を用ふ、故に之れを粗俗に失す」と。此の語蓋し宋僧洪覺範の妄談より出で、殆ど是の理無きならん。近世の學者は往々にして此れに因りて蔑裂として視ず。吳文定公は『白氏長慶集』を讀みて云へる有り「蘇州刺史十たび編り成し、句は人情に近く俗たるの名を得。老に垂んとして讀み來たれば尤も味有り、文人此れより相輕んずる莫し」と。)

白樂天の詩について「老嫗の解を用ひ、粗俗に失す」と言うのは宋の釈惠

洪(洪覺範)『冷齋夜話』の妄談に過ぎず、そうではなく、白樂天の詩は「人の情、物の理に近し」と言える、と評する。とすると、「老嫗」は「字を知らない」というのではなく、この俞弁に拠れば、「人の情、物の理」を解っているという評価を得られる人ということになる。前掲の杜牧の言っていたような「莊人雅士」には作ることも解することもできない詩、世俗の人情と世俗の物の理とを解っている「老嫗」であつてこそ理解できる詩を、白樂天は當時に在つて自らの文学として敢えて主張したことになるのではないか。そして、その点こそ評価に値する、と俞弁は看做す。「俗」の評価という点では、吉川らに承け継がれる見解である。

そもそも「老嫗」像の原型は、類書などに拠れば、古くは『淮南子』許慎注に登場する老嫗あたりまで遡ることができないのではないか。

歷陽中有老嫗、常行仁義。有兩書生告過之、謂曰「此國當沒爲湖、嫗視東城門有血、便走上山、勿反顧也。」自此嫗數往視門。門吏問之、嫗對如其言。東門吏殺鷄以血塗門。明日嫗早往視門有血、便走上山、國沒爲湖。(『文選』劉孝標「辨命論」李善注引『淮南子』叔眞訓「夫歷陽之都、一夕反而爲湖」許慎解)(注9)

(歷陽中に老嫗有り、常に仁義を行ふ。兩書生の告げて之れに過ぐる有り、謂ひて曰はく「此の國は當に没して湖と爲るべし、嫗東の城門に血有るを視ば、便ち走りて山に上れ、反り顧る勿かれ」と。此れより嫗數しば往きて門を視る。門吏之れに問へば、嫗對ふること其の言のごとし。東門の吏鷄を殺して血を以つて門に塗る。明日嫗早に往きて門に血有るを視れば、便ち走りて山に上るに、國没して湖と爲る。)

ここの老嫗は「仁義」を行う人だとある。『淮南子』に於ける「仁義」は、高誘注に「仁義小、道德大也」(仁義は小なり、道德は大なり)と言うように、大道である「道德」が廃れた後に登場する下位の道德概念ではあるが、「秦族訓」に「仁義者治之本也」(仁義は治の本なり)と言ひ、「行仁義

之道以治人倫」(仁義の道を行ひて以つて人倫を治む)と言うように、人倫を安定させ得る。「本経訓」ではさらに「夫仁者所以救争也、義者所以救失也」(夫れ仁は争ふを救ふ所以なり、義は失ふを救ふ所以なり)と言うように、「仁義」を行えば人倫が安定し、具体的には、争いと失礼とを防ぐ。

ここの老嫗もそのような為人の人物として、欺瞞の役人とは対比的に描かれ、その役人に欺かれながらも書生の告知に従うという「仁義」を行い、被災を免れている。これは類型を成すまでには発展しないものの、後の「老嫗」像の一つの原型ではある。

「佩文韻府」等の類書に拠れば、「老嫗」像の一つの原型として、さらに次のような著名な例が挙げられる。漢の高祖の踐祚譚である。

高祖被酒、夜經澤中、令一人行前、還報曰「前有大蛇、當徑。願還。」高祖醉曰「壯士行何畏。」乃前拔劍斬蛇、蛇遂分爲兩、徑開、行數里、醉因臥。後人來至蛇所有、一老嫗夜哭、人問「何哭。」嫗曰「人殺吾子、故哭之。」人曰「嫗子何爲見殺。」嫗曰「吾子白帝子也。化爲蛇當道、今爲赤帝子斬之。」因忽不見。……(『史記』高祖本紀第八)

(高祖酒を被り、夜に沢中を經るに、一人をして前を行かしむれば、還りて報らせて曰はく「前に大蛇有り、徑に當たる。願はくは還らんことを」と。高祖酔ひて曰はく「壯士行くに何をか畏れん」と。乃ち前みて劍を抜きて蛇を斬れば、蛇遂に分かれて兩と爲り、徑開かれ、行くこと數里、酔ひて因りて臥す。後人來たりて蛇の有る所に至れば、一老嫗夜に哭するに、人「何をか哭する」と問へば、嫗曰はく「人吾が子を殺す、故に之れを哭す」と。人曰はく「嫗が子何爲れぞ殺さる」と。嫗曰はく「吾が子は白帝の子なり。化して蛇と爲り道に當たるに、今赤帝の子のために之れを斬らる」と。因りて忽ち見えぬ。……)

「吾が子」すなわち蛇に身を変えていた「白帝の子」を、「赤帝の子」(劉邦)が斬つたと言つて哭く「老嫗」は、白帝の妻ということになる。神

仙界の補佐役的、もしくは老母的存在であり、その「老嫗」が神託とかたちで結果的に劉邦の将来を告げている。

この原型は、類書などに見られる次の二つの類型に発展する可能性を持つものと考えられる。

一つは子や孫を戦で失う老嫗、もう一つは若者の将来の成功を告知する老嫗である。予め言っておけば、前者後者いずれの老嫗も「字を知らない」人であることは見えて来ない。そして、前者は「人の情、物の理」に近い。

#### ア、子や孫を戦で失う老嫗

まず前者の「老嫗」像であるが、時代は降り、よく知られる杜甫の「石壕吏」詩に、

……老嫗力雖衰、請従吏夜歸。急應河陽役、猶得備晨炊。……  
(……老嫗は力衰ふと雖も、吏に従つて夜帰するを請ふ。急かに河陽の役に應ぜば、猶ほ晨炊に備ふるを得んと。……)

という句が見える。この「老嫗」は、三人の息子を全て徴兵で取られ、年老いた夫や年端もゆかない孫までも兵役に駆り出されそうになり、それなら自分を連れて行け、飯炊きくらいはできるから、と役人に詰め寄っている。兪弁の言う「人の情、物の理に近し」とは、白楽天「諷論」詩に見られる主張に鑑らせば、戦に吾が児や夫を取られて哭する嫗や妻の情等を指すと考えられるが、この杜甫「石壕吏」詩には、既にそれをよく解っている「老嫗」が浮上して来ている(注10)。

杜甫のこのような「老嫗」の捉え方は、同時代では理解されにくかったと言われるものの、やがては一つの類型となり、次のような詩として承継がれて行く。

元從邊上住、來此避兵興。麥麩朝充食、松明夜當燈。蔽門麻華華、護壁石層層。老嫗逢人哭、吾兒在謝陵。(宋、戴復古『石屏詩集』卷二「望花山張老家」)

(元より辺上に從ひて住まひ、此に來たりて兵の興を避く。麥麩朝に食に充て、松明夜に燈に當つ。蔽門は麻華々と、護壁は石層々たり。老嫗人に逢ひて哭す、吾が兒は謝陵に在り。)

田家老嫗俱垂白、敗屋蕭條無壯息。翁攜鎌索嫗攜箕、自向薄田收黍稷。靜夜偷春避債家、比明門外已如麻。筋疲力敵不入腹、未議縣官租稅促。

(宋、司馬光『溫國文正司馬公文集』卷二「道傍田家」)

(田家の老嫗俱に白きに垂んとするに、敗屋蕭條として壯息無し。翁は鎌索を携へ嫗は箕を携へ、自ら薄田に向かつて黍稷を収む。靜夜偷かに春きて債家を避くるも、明くるに比べ門外已に麻のごとし。筋疲れ力敵れて腹に入らざるに、未だ議せざるの県官租稅促す。)

一首目の宋の戴復古「花山の張老の家を望む」詩には、「一老嫗逢人必大哭云『我兒在謝陵、不歸也。』光州有謝陵橋、其子與虜戰死于此。」(一老嫗人に逢へば必ず大いに哭して云ふ「我が兒は謝陵に在りて、歸らざるなり」と。光州に謝陵橋有り、其の子虜と戦ひて此に死す。)という自注が付いている。

これらに詠まれる「老嫗」は杜甫の詠んだ像と同じく、官の横暴により若き男手を兵に取られ、老いて疲弊しきつた民である。したがってこの「老嫗」も身をもつてそのような民情を解っている人ということになる。

そのような悲酸な状況ばかりではなく、しばしの憩いといった生活感を得ている「老嫗」像も、宋代には見られなくもない。たとえば「永嘉の四靈」のひとり徐照の捉える「老嫗」には、

漁師得魚繞溪賣、小船橫繫柴門外。出門老嫗喚鷄犬、收斂蓑衣屋頭晒。

賣魚得酒又得錢、歸來醉倒地上眠。小兒啾啾問煮米、白鷗飛去蘆花煙。

(宋、徐照「分題得漁村晚照」)

(漁師魚を得て溪を繞りて売り、小船横に繫ぐ柴門の外。門を出でて老嫗鷄犬を喚び、蓑衣を收斂して屋頭に晒す。魚を売り酒を得て又た錢を得、歸り來たり酔ひて地上に倒れて眠る。小兒啾々として米を煮るかと思へば、白鷗飛び去つて蘆花煙る。)

と詠まれるような者もある。しかし、類型として捉えるならばこの例は除かれよう。やはり悲酸な者であることの方が多い。それは次の時代にも承け継がれる。たとえば明の陳基の詩には、

歲暮涉淮海、不辭行路難。從軍豈不樂、即事每長嘆。老嫗八十餘、日晡未朝飧。自云遭亂離、零落途路間。豈無子與孫、充軍皆不還。男戰陷賊壘、孫存隔河山。數月無消息、安能顧飢寒。語畢雙淚垂、使我心悲酸。

上天未悔禍、豺虎方搆患。近聞山東變、世路復多端。悠悠顛沛人、何時即平安。(明、陳基『夷白齋集』卷三「述老嫗語」)

(歲暮淮海に涉り、行路の難きを辭せず。從軍豈に樂しまざる、事に即きては毎に長嘆す。老嫗八十餘、日晡るるも未だ朝飧せず。自ら云ふ亂離に遭ひ、途路の間に零落すと。豈に子と孫と無からんや、軍に充てられて皆還らず。男は戦ひて賊壘に陥ち、孫は存するも河山を隔つ。數月消息無し、安んぞ能く飢寒を顧みんや。語畢きて双淚垂れ、我が心をして悲酸たらしむ。上天未だ禍ひを悔いず、豺虎方に患ひを構ふ。近ごろ聞く山東の變、世路復た多端なりと。悠々たり顛沛の人、何れの時にか平安に即かんや。)

と見える。明代になっても依然として「老嫗」は、禍い多き世路に零落し、男手を子ばかりでなく孫までも戦争に取られ、飢えや寒さに苦しむ、いつまでも平安を得られない顛沛の人である。

白楽天も、そのような俗世の理不尽に身を疲弊させている「老嫗」が、決して「狂人雅士」ではないからこそ、むしろ我が作る詩の理解者となり得ると考えたのではないだろうか。それを所詮、童習嫗解の詩であると貶めてしまえば、当然のことながら「俗」に失して「雅」とは評価され得ず、郭沫若の指摘するように「狂人雅士」の軽蔑、敵視をうけるという結果をももたらすに至る。

ただし少なくとも、歴代の「老嫗」は、以上のような杜甫の詩およびそこから形成されてきた類型的な像からも分かるように、必ずしも「字を知らない」人だけを意味しない。

### イ、若者の将来の成功を告知する老嫗

次に、前掲の「老嫗」兩類型のうちの後者について見たい。

まず、白楽天の俗っぽさを指摘した張本人とされる『冷齋夜話』の著者、宋の釈惠洪であるが、彼は別の著書『石門文字禪』では、次のような老嫗を取り上げている。

禪師初與異僧游天台、渡溪方悟其爲異也、悔不能早識之、且將折其脛。而後已尋、北游值老嫗於洛下、與之語多所發藥、遂待以師禮、嫗知其非尋常人、俾更謁江西大寂。既至而祖已化去、逾月矣。而見其子海公、海以所嘗悟明之緣示之、公悟大法於言下。〔石門文字禪〕卷二十五「題斷際禪師語錄」(注1)

(禪師初め異僧と天台に遊び、溪を渡りて方めて其の異と為すを悟るや、早に之れを識る能はず、且つ將に其の脛を折らんとするを悔ゆ。而る後に已に尋ね、北のかた遊ぶに老嫗に洛下に値ひ、之れと語りて発藥する所多く、遂に師礼を以つて待すれば、嫗其の尋常の人に非ざるを知り、更に江西大寂に謁せしむ。既に至れば祖已に化し去り、月を逾えたり。而して其の子の海公を見るに、海嘗て悟明する所の縁を以つて之れ

に示せば、公大法を言下に悟る。)

釈惠洪の目に映った「老嫗」は、斷際禪師に悟りを開く契機を与える老師格の存在である。

この話は、李白の「老嫗磨鍼」の伝説を想起させる(注12)。

磨鍼溪在彭山縣象耳山下。相傳、「李白讀書山中、學未成棄去、適過是溪、逢老嫗方磨鍼杵。問何爲、曰欲作鍼。白感遂還卒業。」〔淵鑑類函〕卷三十三引『統志』

(磨鍼溪は彭山県象耳山の下に在り。相伝ふ、「李白書を山中に読み、學未だ成らずして棄て去るに、適たま是の溪を過ぎ、老嫗の方に鉄杵を磨くに逢ふ。何をか為すと問へば、鍼を作らんと欲すと曰ふ。白感じて遂に還りて業を卒ふ」と。)

この「老嫗」も、よく知られるように、李白に学業を成就させている。老師格としての像は、すでにここに見えていることになる。

その原型は、恐らくは更に次のような、出会った若者を非凡の者と見抜く老嫗の故事まで遡ることができるのではないか。

晉劉道真遭亂、於河側牽缸、見一老嫗搖櫓。道真嘲之曰「女子何不調機弄杼、因甚旁河搖櫓。」答曰「丈夫不跨馬揮鞭、因甚旁河牽缸。」又嘗與人舛中同盤共飲、見一嫗將兩小兒過、並着青衣、嘲之曰「青羊引雙羔。」婦人曰「兩猪共一槽。」道真無以對。(宋、阮閱『詩話總龜』前卷三十七「譏詭門」下引「唐、趙璘『因話錄』」)

(晋の劉道真亂に遭ひ、河の側に於いて缸を牽くに、一老嫗の櫓を揺らすを見る。道真之れを嘲りて曰はく「女子何ぞ機を調べ杼を弄せず、甚に因りてか河を旁らにして櫓を揺らす」と。答へて曰はく「丈夫馬に跨がりて鞭を揮はず、甚に因りてか河を旁らにして缸を牽く」と。又た嘗

て人と艸中にて盤を同にし飲を共にするに、一姫の両小兒を將りて過ぎ、並びに青衣を着るを見、之れを嘲りて曰はく、「青羊双羔を引く」と。婦人曰はく、「兩猪一槽を共にす」と。道真以つて対ふる無し。」

機知を効かせることとうまい、一つ格の上の「老嫗」が登場している。ただしここではまだ若者の才を見抜く「老嫗」とまでは言えない。劉道真(宝)にはもう一つ逸話がある。

劉道真少時常漁草澤、善歌嘯、聞者莫不留連。有一老嫗、識其非常人、甚樂其歌嘯、乃殺豚進之。道真食豚盡、了不謝。嫗見不飽、又進一豚、食半餘半乃還之。後爲吏部郎、嫗兒爲小令史。道真超用之、不知所由。問母、母告之。於是齋牛酒詣道真、道真曰「去、去、無可復用相報。」(『世説新語』卷下之上「任誕」一七)

(劉道真少き時常に草沢に漁し、善く歌嘯すれば、聞く者留連せざる莫し。一老嫗有り、其の常人に非ざるを識り、甚だ其の歌嘯を樂しめば、乃ち豚を殺して之れに進む。道真豚を食して尽くすも、了に謝せず。嫗飽かざるかと見、又た一豚を進むれば、半ばを食し半ばを餘して乃ち之れを還す。後に吏部郎と爲り、嫗の兒は小令史と爲る。道真超えて之れを用ふれば、由る所を知らず。母に問ふに、母之れを告ぐ。是に於いて牛酒を齋らして道真に詣れば、道真曰はく「去れ、去れ、復た用つて相報ゆべき無し」と。)

劉道真の歌っていたのはその志の現れた「歌嘯」ではなかったかと推測されるが、ここには若者のそのような歌に込められた思いの解る、またそれを聞き取ること若者が非凡の人物であることの解る「老嫗」がいる。

このような、若者の将来を占う「老嫗」像は、その原型をさらにある種の仙人譚まで辿ることができるように思う。

汝南何比干、字少卿、爲汝陰縣獄吏決曹掾、平活數千人、後爲丹陽都尉、獄無冤囚。淮汝號曰「何公。」征和三年三月辛亥、天大陰雨、比干在家、日中夢、貴客車騎滿門。覺以語妻、語未已、而門有老嫗、可八十餘、頭白、求寄宿雨、雨甚而衣履不霑。雨止、送出門、乃謂比干曰「公有陰德、今天錫君策、以廣公之子孫。」因出懷中符策、狀如簡、長九寸、凡九百九十枚、以授比干、曰「子孫佩印綬者、當隨此算。」嫗東行忽不見。自比干以下、與張氏俱授靈瑞、累世爲名族。三輔舊語曰「何氏策、張氏鈎也。」(明、董斯張『廣博物志』卷十六引「漢、趙岐『三輔決錄』」)

(汝南の何比干、字は少卿、汝陰県の獄吏決曹の掾と爲り、數千人を平活し、後に丹陽の都尉と爲り、獄には冤囚無し。淮汝は号して「何公」と曰ふ。征和三年三月辛亥、天大いに陰雨あり、比干家に在り、日中、貴客の車騎の門に滿つるを夢みる。覺めて以つて妻に語れば、語未だ已はらざるに、門に老嫗有り、八十餘ばかりにして、頭は白く、寄りて雨を避けんことを求むるに、雨甚しきも衣履は霑漬せず。雨止み、送りて門を出づるに、乃ち比干に謂ひて曰はく「公には陰德有り、今天は君に策を錫ふ、以つて公の子孫を廣くせん」と。因つて懷中の符策を出だせば、狀は簡のごとく、長さ九寸、凡そ九百九十枚、以つて比干に授けて、曰はく「子孫の印綬を佩する者、當に此れに隨ひて算ふべし」と。嫗東のかた行きて忽ち見えず。比干より以下、張氏と俱に靈瑞を授かり、累世名族と爲る。三輔旧語に曰はく「何氏の策、張氏の鈎なり」と。)(注四)

ここで何比干の隱徳を見抜いた不思議な「老嫗」は、天帝の使いであり、仙界の存在である(注四)。

以上のような、若者の非凡な才を見出だし、将来を告知する「老嫗」は、次の例のように類型化して行く。



裴航遇雲翹夫人、與詩云「一飲瓊漿百感生、玄霜搗盡見雲英。藍橋便是神仙路、何必區區上玉京。」後經過藍橋渴、一舍有老嫗、揖之求漿、嫗令雲英擊一甌漿水飲之。航欲娶雲英、嫗曰「但得玉杵玉臼當與之。」後航得杵臼爲搗藥、遂得娶而仙云。(宋、祝穆『古今事文類聚前集』卷三十四引「唐、裴翺『傳奇』裴航(「藍橋遇仙」))

(裴航は雲翹夫人に遇ひ、詩を与へて云はく「一たび瓊漿を飲まば百感生じ、玄霜搗き尽くして雲英を見ん。藍橋は便ち是れ神仙の路、何ぞ必ずしも区々として玉京に上らんや」と。後に藍橋を経過して渴くに、一舍に老嫗有り、之れに揖して漿を求むれば、嫗は雲英をして一甌の漿水を撃けて之れに飲ましむ。航は雲英を娶らんと欲すれば、嫗曰はく「但だ玉杵玉臼を得て当に之れに与ふべきのみ」と。後に航は杵臼を得て爲に藥を搗き、遂に娶るを得て仙たりと云ふ。)

ここで裴航に得仙の将来性のあることを見抜いた「老嫗」も、この唐代伝奇(裴翺「裴航」)の後半で、月の仙人であることが明かされている(注15)。さらに、次のような例も見られる。

郷人危紋應舉探省榜、出門數步逢泥濘。老嫗指示秀才可低處過、危即從之。看榜最末有名、是歲果及第。(宋、祝穆『古今事文類聚別集』卷三十二「出門應識」)

(郷人の危叙は挙に應じて省榜を探すに、門を出づること數歩にして泥濘に逢ふ。老嫗指して秀才低処に過ぐべしと示せば、危は即ち之れに従ふ。榜を看れば最末に名有り、是の歳果して及第す。)

ここにも「老嫗」の指示に従うことによつて科挙及第の託宣を授かる危叙という若者がいる。

あるいは白楽天もそのような「老嫗」像のあることは知っていて、自らもその託宣を得るべく老嫗に詩を見せた(そのような意図のもとに伝説が作ら

れた)とすると興味深いが、もはやそれは本題から外れて来よう。

話を戻すが、これら、非凡な若者の将来を告知する不思議な「老嫗」像も、杜甫詩の類型で捉えたのと同様、一つの類型とは成っているものと考えられる。ただしそこから、「字を知らない」人は見えて来ないように思われる。

もつとも、白楽天「老嫗解」の「老嫗」が右のような像にまで辿り着いてしまうと、逆に白楽天が意見を求めた「老嫗」像とはかけ離れてしまうように思う。白楽天は自分や自分の文学の将来性を老嫗に占つてもらうために、その託宣を得たいがために、自作について意見を求めているのではないであろう。あくまでも自らの詠んだ民情が民間に通用するかどうかを確認するに止まるのではないか。

とすれば、白楽天が詩を見せたとする「老嫗」は、以上の「二」で捉えた類書等に見られる両類型のうち、後者、すなわち若者の将来を占う仙人譚の延長線上に在る像がそれだとするよりも、やはり前者、すなわち杜甫の詩に詠まれたような像をもつてする方が、この両者から選択する限りに於いて、妥当であるように思われる。

### 三、結語

以上の考察からは、白楽天「老嫗解」の「老嫗」像として、仙界の老母の要素を持ちつつも(注16)、明の俞弁『逸老堂詩話』が指摘していた白詩の持つ「人情物理に近し」という要素が賦与された人物、すなわち俗情民情をよく理解している人物という像が、やはり浮かび上がってくる。それは例えば、戦に吾が兄や夫を取られて哭する嬖や妻の情を持つということになる。清の舒位が白楽天の「女は歌ひ、嫗は解し、伎は絲を弾く」という状況を創出している白詩に価値を見出したのも、彼女たちが女性の立場から白詩の持つそのような「人の情、物の理」を「絶妙」だと評価していたと見てのことではないか。そしてそれこそが「老嫗の解」を得て白楽天が表出した白詩

の主張そのものであろう。

それを「俗」と呼び、「雅」でないとして貶めるのであれば、それはそれで、また一つの価値観であろう。しかしそれは、少なくとも白楽天が頼った老嫗を「字を知らない」人物と看做して貶めている批評としては、管見の及ぶ限りでは、見えて来ないように思う。

朱自清の「雅俗共賞」論(注1)に拠れば、明清以降は「官は逼り民は反く」こそが民の「常の情」としてテーマになり得る。そして通俗文学が始まる。白楽天は「民反く」とまでは言い切れないまでも、杜甫を承け、「諷諭」詩によってすでにその方向を打ち出している。白楽天にとっては、それこそが主張すべき「人の情、物の理」であつたからこそ、伝説に基づけば、そこで老嫗の見解を求めたのではないだろうか。ただ如何せん、宋代以前の評価基準に鑑らせば、より高く評価されるべき「雅」を傷めてしまつてゐる嫌いはある。そういう意味では、主張を「老嫗の解」に託したことは、却つて「俗」な「お婆さん」にでもよく分かる」詩でしかなかつた。(本格的な再評価は明清以降を俟つことになる。)

なお、白楽天は幼い頃、父は地方官で家にいないことが多く、その教育は母親や外祖母が担つていたと言ふ(注18)。おそらく、使用人も含め、家の女性達は皆でこの男の子の教育に当たつていたのではないか。白楽天は後に元徴之に与えた手紙(「與元九書」)の中で、自らの幼少の頃を次のように回想している。

僕始生六七月時、乳母抱弄於書屏下、有指「無」字「之」字示僕者、僕雖口未能言、心已默識。後有問此二字者、雖百十其試、而指之不差。

(僕始めて生れて六七か月の時、乳母抱きて書屏の下に弄び、「無」字「之」字を指して僕に示すこと有り、僕は未だ言ふ能はずと雖も、心は已に黙して識れり。後に此の二字を問ふ者有り、百十たび其れ試みると雖も、而も之れを指して差はず。)(注19)

すでに「乳母」が幼い白楽天の文字教育に参加していることが知られる。白楽天が成長したのち自らの詩を読んでもらい、「解するや否や」を問うた「老嫗」も、あるいは家に在つたこのような女性ではなかつたか。元の辛文房「唐才子伝」巻六には、「白居易……毎成篇必令其家老嫗讀之、問解則録」(白居易は……篇を成すことに必ず其の家の老嫗をして之れを讀ましめ、問うて解すれば則ち録す)とある。勿論「老嫗の解」伝説を承けてのことではあるが。

注1、「味」は、鳥のくちばし。こゝは詩人としてのものを言う優れた口。

注2、朱自清「論雅俗共賞」(三聯書店 一九八三)に拠れば、宋代にも「雅俗共賞」論は進められたものの、黄山谷が「以俗爲雅」説を主張し、蘇東坡、梅聖俞も「俗不傷雅」説を志向したために、結局は「俗不可耐」となつたと言ふ。

注3、彭乘(彭城)は、范仲淹(九九九—一〇五二)と同時代の人。

注4、「お婆さん」にでも「字を知らないばあさん」という言い方は、見方によっては、そこに偏見や蔑視を認め得る。

注5、舒位「瓶水齋詩集」卷七(臺灣新文豐出版公司印行「叢書集成新編」第七二冊所収)による。舒位のこの詩については、王拾遺「白居易傳」(陝西人民出版社 一九八三)が既に取り上げている。また、舒位の略歴等については、「中國詩話辭典」(北京出版社 一九九六)に詳しい。なお、絶句中の「鶴林相」は「新唐書」卷一百十九「白居易傳」の「……居易於文章精切、然最工詩。初頗以規諷得失及其多更下偶俗好至數千篇、當時士人爭傳、鶴林行賈售其國相、率篇易一金……」を踏まえる。「鶴林賈」は新羅の商人。詩文が精美であれば、人が購求するの意。

注6、朱自清「論雅俗共賞」(三聯書店 一九八三)は、元明の「西廂記」「水滸伝」以降、「官逼民反」説が進んだからであると言ふ。

注7、「歷代詩話續篇」(臺灣藝文印書館 一九七四)所収による。

注8、李西涯「詩話」は明の李東陽(賓之)「懷麓堂詩話」、吳文定公の詩は明の吳寛(原博)「校白集雜書」六首之二(「策翁家藏集」卷二十四所収)を、それぞれ指す。

注9、この文の前に、許慎解として「歷陽、淮南之縣名、今屬九江郡」とある。

注10、朱自清「論雅俗共賞」(三聯書店 一九八三)に言う「官逼民反」の先行例とも言える。

注11、「發藥」は、薬を施すように人に善言を勧める意。「大寂」は江西禪の祖、大寂馬祖をいう。

注12、明の王陽明『王文成公全書』附録卷二に「真武山中久坐無得、欲棄去、感老嫗磨針之喻、復入山中二十年、遂成至道」と見え、また同じく明の貝瓊『清江集』にも「李侯卒業於磨鍼」と見える。

注13、この「何氏濟活」(何氏の策)の故事は、『搜神記』卷九にも見える。「平活」は、冤囚を救う意。

注14、清の錢謙益はこの故事を典故として好んで用いている。たとえば「馮亮工六十序」には「史稱、何比干、與張湯同時、用法仁慈、數與湯爭、所濟活者以千數。天帝使老嫗賜策曰『公有陰德。』帝賜策九十九枚、子孫佩印綬、當以此算。」(『牧齋有學集』卷第二十二)と何比干の故事を引用し、馮亮工を比干に擬えてその陰德(隱德)を称える。類型化しているためであろう。

注15、裴劍「裴航」に「航又聞搏藥聲、因竊之、有玉兔持杵曰、而雪光輝室、可鑿毫芒、於是航之意愈堅」とある(汪辟疆『唐人小說』上海古籍出版社 一九七八)。

注16、『禮記』樂記の「煦嫗」は、体温で温め育てる意であるが、「老嫗」は「老嫗」と言うのと同じく、もともと温かさの意をもつ。したがってこの語は、自ずと老親的存在の概念を伴う。

注17、朱自清『論雅俗共賞』(三聯書店 一九八三)所収。

注18、王拾遺『白居易傳』(陝西人民出版社 一九八三)に拠る。

注19、中国古典文學基本叢書『白居易集』卷十五(中華書局 一九七九)による。なお、「百十」は概数で、数の多いこと。